九里半街道・伊勢西街道

牧田宿

監修
大垣市教育委員会
市史編纂室長
清水 進

九里半街道 ◆物流の一級街道◆

牧田川の揖斐川との合流点から上流にかけて養老町船附・栗笠・烏江の三つの集落があり、江戸時代を中心に川湊がありました。尾張藩の庇護のもと、三百年間栄え、「濃州三湊」と呼ばれていました。

現在の流通はトラックを中心に鉄道・飛行機ですが、昔は舟を利用した水上運搬が、大量に運べ便利でした。そこで尾張（名古屋）や伊勢方面の荷物を、関西（京都・大坂）北陸方面へ**一番短く・一番速く・一番安く**運べるルートが考えられました。大量安価の面で外洋を運ぶのが最良ですが、江戸時代は船が小さく困難のため、伊勢湾から揖斐川をのぼり、「濃州三湊」まで舟で運び、ここから陸路を利用し**牧田宿**を中継して、琵琶湖の朝妻湊まで運び、さらに湖上を運ぶルートです。

金草川堤防にある九里半街道の道標

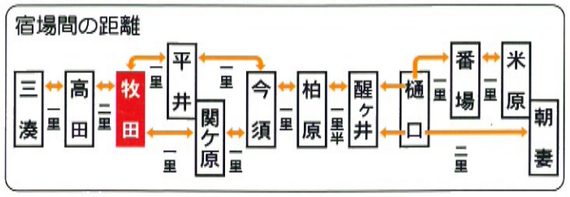
陸上ルートは時代と共に変わりますが、三湊から金草川沿いに高田・五日市を経て沢田にでます。ここで牧田川を渡り、乙坂を西に進み、山手の路（現在は名神高速道路の開通により、なくなる）を通り山村に入り、旧県道を二又へと進みます。

中山道と九里半街道の分岐点にあった道標

ここからは、街道の面影残る昔の道を牧田小学校までたどります。再び旧県道を「牧田宿」（上野）から、一色・門前・烏頭坂を経て、関ヶ原宿へ、一方牧田宿から平井川沿いに平井を通って今須宿へ、二つのルートがあり、利害関係で紛争がたびたびありました。

関ヶ原宿からは中山道を今須宿・柏原宿・醒ヶ井宿・番場宿をつないで米原湊・朝妻湊に至るもので、距離およそ**九里半（38㎞）**あることから**「九里半街道」**と呼ばれていました。

宿場間の距離



牧田宿と伊勢街道

中山道関ヶ原宿から南へ向かう道が伊勢街道です。この街道は伊勢路ともいい、「正保国絵図」に関ヶ原宿から牧田宿、一之瀬村、多良村、時村を通って伊勢国へ入る道筋が記されており、これが**伊勢西街道**に当たります。また、牧田宿から沢田村、津屋村、徳田村、上野河戸村、安江村を経て伊勢国へ入る道筋は**伊勢東街道**です。

この東西の伊勢街道は、西美濃の産物の輸送路やお伊勢参りの往還として重要な街道でした。慶長6年(1601)旗本高木氏が領主として入部すると、木曽三川の見廻りや参勤交代のため、この街道を通りました。また、幕府の巡見使が通行したので**「御巡見道」**とも呼ばれました。

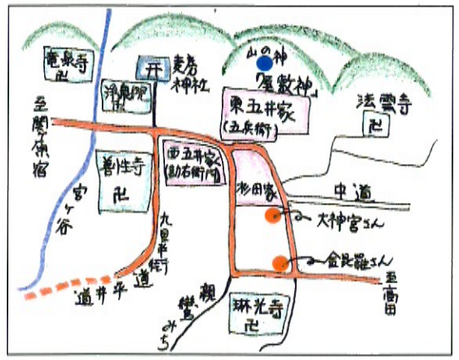
牧田宿は九里半街道を通る旅人や荷物のための宿場としても賑いました。『濃州徇行記』に牧田宿は「街道に付しければ、村立よき所にて長屋門など構えたる百姓など四、五軒あり、その外、百姓共は街道筋、牛馬諸荷物の付け送りを以て渡世の助けとせり」と記されています。

発行 九里半歴史文化回廊
大垣市上石津町牧田 4024-5 ☎0584-47-2301

牧田宿 ◆大垣市景観遺産◆

牧田宿は中山道の関ヶ原宿へ1里、今須宿へ2里、濃州三湊まで3里の中継点として、江戸時代まで繁栄しました。諸荷物の運搬には当時の人々がたずさわっており『関ヶ原町史』によれば、次のような荷物を扱いました。

下り	上方から	畳表類・木綿類・鰹節・竹皮
		多葉粉・糸綛・藍・小間物
	北陸から	奉書・笠類・打刃物・刻昆布
上り	信州・上州	麻・梨・苧皮
	尾張・濃州	切干・紙類・荏油
	勢州より	鰯・さんま・荒布・若布



天保12年(1841)関ヶ原宿から牧田宿への荷物は7,454駄(1駄は150kg)で上り荷はこれより多かったと思われます。さらに商業荷物以外の、大坂などへの年貢米運搬がありましたから、常備人足・伝馬では対応が困難になり、**助郷制度**が適用され、人馬を調達して急場をしのぎました。これを取り仕切った問屋は、天領扱いの**五井五兵衛**と尾張藩扱いの**五井勘右衛門**でした。

また、伊勢街道の分岐点として伊勢詣でや、谷汲華厳寺への巡礼街道、さらに中山道と東海道を結ぶ美濃の中道も通っていました。現在も「馬つなぎ石」が残っています。

五井家と九里半街道

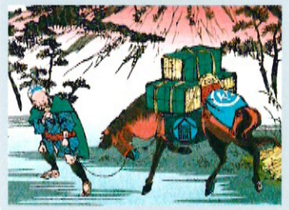
上り荷をめぐり関ヶ原宿と今須宿・牧田宿連合の間で、慶長16年(1611)に紛争がおきたことがあります。三湊からの荷物は関ヶ原宿へ継ぎ立すると決まっていましたが、脇道の平井道は平坦で運賃も安く、直接今須へ継ぎ立したことから起こりました。裁許は上り荷は今須宿、下り荷は関ヶ原宿経由で決着しました。

馬つなぎ石

江戸時代は問屋が村役(庄屋)を兼務し、門前では「五兵衛新田」の開発も手がけ、また、三湊の問屋から年賀を受けるなどして、繁栄しました。しかし、幕府の崩壊で牧田宿は街道と共に衰退しました。

一助郷制度一

寛永14年(1637)に設定されました。労力提供と金納の2種類があり、常備の人馬で間にあわない場合に人足・馬の提供を各村に割当てられたのが助郷です。**牧田宿は12ヶ村**で多良・白石・明徳・小倉・大跡・岩道・上之郷・祖父江・飯積・綾野・久徳・塩田です。元禄7年(1694)1月の規定では助郷高は8,062石4斗で、石高**100石につき人夫2名・馬2頭**の割りで出役しました。江戸中期から扱荷の増大と共に助郷の出役が増え、農民は大変苦しみ、人馬を出せない者はお金を出し、やり繰りに苦労した事、更に街道整備も課せられ、明治維新まで続きました。参考ですが、関ヶ原・牧田間の駄賃は天保12年(1841)で102文(馬方渡76文・問屋口銭22文)でした。



道標（道しるべ）

❷ 二又の辻

旅人に方向や距離を示し、木や石で辻などに立てられていました。現在街道には5個残っています。二又の道標には、「右たら・左たか多」「右京道」と彫られ、伊勢西街道と東街道の分岐点を示しています。

分れ道だった所から**二又**の地名になった有力な根拠といわれています。

❶ 山村谷山谷
「右大かき道」

牧田には九里半街道に関係ない処に二個あります。

❻ 旧平井橋北
「藤古川橋」
「平井へ十八丁」
「明治四十一年
施主 高木徳弥」

❹ 上野琳光寺西
「左平井今須」
「親鸞聖人御
旧跡所」

外 烏頭坂の追分
「左旧道」九里半街道を示す

街道と民俗信仰

❶ 乙坂の馬頭観音

馬頭観音

一般的には、怒った顔が3面又は4面、手は6本又は8本、正面の顔に目が3眼、頭部に馬の首をつけているのが特徴です。江戸時代には、馬が交通手段として重要な位置をしめるようになり、馬と旅の安全を守る仏として信仰が集りました。

牧田の馬頭さんは、怒った顔は無く、穏かな顔つきです。時代が馬から牛に変わり一部で**「牛頭さん」**と呼んでいます。

常夜燈（燈明さんと呼ばれています）

古くは、神社仏閣で2基1対で燈明台を献灯する様になり、灯は清らかで、尊いものとしてあがめられ、その後お参りが困難な神社・寺院に献灯し祈りをささげる対象として、個人の寄進で辻や道ばたに奉納されました。

牧田の常夜燈には、自然石・宮前形の「伊勢大神宮」「金毘羅大権現」「秋葉山」があり、他地区に多い山灯篭形はありません。又、山村地区のみ常夜燈が無いのも不思議です。

街道では、夜間の**「陸の灯台」**として、とても重要でした。

⑪ 和田の太神宮

⑩ 萩原の両皇大神宮

外 沢田の大神宮